

# 火野葦平『陸軍』の基礎的研究

松本和也

要旨：この論文では、太平洋戦争末期に『朝日新聞』紙上に連載された新聞小説である、火野葦平『陸軍』をとりあげる。『陸軍』先行研究においては、単行本の印刷日が太平洋戦争終戦日（1945年8月15日）であったことへ論及が集中したほか、日本の近代史・陸軍の歴史を高木家の視座から描いた物語としての要約（記述）が大部分を占めるという状況にとどまっている。そればかりか、『陸軍』に関しては、書誌情報すら、現物を確認したとは思えないほどにミスが多い。しかし、『陸軍』は、太平洋戦争末期の新聞に1年弱にわたり連載され、多くの読者（国民）の目に触れるものであった以上、狭義の文学領域にとどまらない範囲で意味作用を果たした、重要な作品だといえる。そこで本稿では、『陸軍』研究のスタートラインを引くために、新聞紙上の初出掲載状況や単行本との異同の確認、同時代受容の様相まで調査・整理を進め、研究基盤の整序を目指した。

キーワード：新聞小説、戦争文学、太平洋戦争、軍人勅諭、従軍記

## 1. 問題関心

「麦と兵隊」（『改造』1938.8）を嚆矢とした「兵隊三部作」によって、日中戦争期に戦争－戦場をモチーフとした小説を書きついだ火野葦平<sup>(1)</sup>は、「戦争文学」の旗手として活躍をつづけ、1942年には、白紙徵用によってフィリピンでのバターン作戦に従軍する。同年8月にはバターン半島総攻撃従軍記である『兵隊の地図』（改造社、1942）を刊行、11月には任を解かれて帰還した<sup>(2)</sup>。それから半年後の1943年5月から、火野は『朝日新聞』に「陸軍」の連載を開始、連載終了後には単行本『陸軍』（朝日新聞社、1945）が刊行される<sup>(3)</sup>。その最大公約数的な概要は、次のようなものである。

本作品は、明治維新のさい長州奇兵隊に参加した一家の、のち三代にわたる陸軍との因縁を描いた大河的小説であった。明治四年から七〇年に及ぶ陸軍の歴史を、その底辺を支える兵士たちの軍隊生活の視点から描いており、戦中文学的一大雄篇といえる<sup>(4)</sup>。

これを変奏すれば、『陸軍』とは、「幕末から太平洋戦争期までの、日本の「歴史」的発展を、軍隊＝陸軍を軸に、次々と軍人を育てていく高木家の四代にわたる家族の歴史と重ねて描いた壮大な物語」<sup>(5)</sup>、「明治四年にはじまる陸軍七十年の歴史を、ひとつのモノガタリの中に収めよう——という、野心的ともいえる構想のもとに書かれた小説」<sup>(6)</sup>、そして「日本帝国あるいは帝国陸軍と運命をともにした高木家の三代（同時に日本の明治・大正・昭和三代）の物語」<sup>(7)</sup>となる。また、『陸軍』にみられる「火野らしい特徴」として、「陸軍に関わりを持つといつても、軍の設立に直接関わったり将官として活躍した英雄という形ではなく、市井の暮らしのなかでいろいろと軍人の世話をしたりするという形で関

わりを持つという設定」<sup>(8)</sup>が指摘されてもきた。

火野葦平による自筆年譜「昭和二十年（一九四五）三十九歳」の項には、次のように書かれている。

朝日新聞社から、単行本「陸軍」が刊行されたが、「印刷八月十五日、発行八月二十日」という奥附になつていたため、市販にならず、一部が少数の人に配られ、他は焼いてしまつたということである<sup>(9)</sup>。

上に示されたとおり、『陸軍』は奥付に「昭和二十年八月十五日印刷／昭和二十年八月二十日発行」と記されており、それゆえ記念碑的な書物と目されてきた<sup>(10)</sup>。こうした事例の特異性は、出版史においても次のように特筆されてきた。

『陸軍』（B6判・六八八ページ・五円・三万部）は、印刷日八月十五日、発行日八月二十日の予定になっていたのである。敗戦を察知した山川武祐（当時刊行部長）は、しきりに印刷所を督励した。「せっかく苦労して、そのまま闇に葬るには忍びないというわけで、昼夜兼行、製本に馬力をかけ、十日から配本を始めて、十五日の終戦までに、とうとう売りつくしてしまつた」と、山川は当時を回顧している（前掲『出版生活三十三年抜書』より）。

もっとも、本社裏（別館まえ）に大八車を屋台代わりに使って、これに山積みして即売までしたとのことである。それでもなお、御茶ノ水駅前などの街頭にうず高く積まれて、投げ売りされていたという（『週刊読書人』昭42・8・21）<sup>(11)</sup>。

なお、戦後、火野は戦時の文学活動を理由に公職追放となるが、『火野葦平選集〔全八巻〕』（東京創元社、1958）によせた自筆「解説」のなかで、1945年8月15日について次のように述べている。

昭和二十年八月十五日——この日がどうして忘れられるであろうか。太平洋戦争がポツダム宣言受諾による日本の全面的降伏によつて終結したこの日から、十三年が経つた。終戦直後、敗北による動搖と混乱とは言語に絶した。いやな思い出である。しかし、この教訓を絶対に忘れてはならないのである。忘れるどころか、これを事あるごとに思いだし、その体験を反芻して明日への生き糧としなければならない<sup>(12)</sup>。

火野は、戦後13年が経過した時点において、「昭和二十年八月十五日」を、「いやな思い出／教訓」と両義的に捉えている。そうであれば、その日付を奥付にもつ『陸軍』についても、複雑な捉え方があつただらうことは想像に難くない。とはいえ、『陸軍』は戦後における戦争文学への逆風やその分量的な長さにも関わらず、いくたびも再版されてきた人気作でもある。

ここで、初刊単行本以降に刊行された書物としての『陸軍』を並べてみれば、以下のようになる。

『小説陸軍〔原書房・100冊選書〕』（原書房、1966）

『陸軍』（原書房、1973）

『陸軍〔火野葦平兵隊小説文庫6〕』（光人社、1979）

『小説陸軍（上・下）』（中央公論新社〔中公文庫〕、2000）

『小説陸軍（上・下）』（小学館〔P+D BOOKS〕、2021）

こうした刊行状況自体が、本書の特異性をよく表している。奇しくも2000年に刊行された二冊の火

野葦平関連書籍には、著しく対立する『陸軍』評が読まれる。中公文庫版『小説陸軍』に「解説」を寄せた村上兵衛は、その末尾に「戦後久しく省みられなかった戦時中の作品が、文庫版として残されることに、私は大きな意義を感じる」、「そして幽明異にする火野さんに、改めてお祝いを言いたい」<sup>(13)</sup>と書いた。他方、火野葦平を主題とした研究書を上梓した池田浩士は、その「あとがき」に、「火野葦平の『兵隊もの』のうちでも『小説陸軍』があいかわらず好んで再刊されるという事実のなかには、日本社会のみじめさが反映されている、ということだけは言っておきたい」<sup>(14)</sup>と書きつけずにはいられない。

ただし、『陸軍』再刊の賛否を論じ、また、内容に関わる読解・批評を展開する以前に、「陸軍」-『陸軍』については、太平洋戦争末期の発表だったこともあり、初出連載・初刊単行本に関する書誌情報も整っておらず、本文異同についてもまだ検証されていない。

そこで本稿では、太平洋戦争末期に書かれ、終戦日に印刷され、戦後も再刊が途絶えない火野葦平『陸軍』-『陸軍』をとりあげ、新聞紙上の初出掲載状況や単行本内容の確認からはじめ、初出紙／初刊単行本間の本文異同の検証、同時代受容の調査－分析などによって、基礎的な研究を進めていきたい。

## 2. 「陸軍」初出掲載状況

本節では、初出形態である、火野葦平「陸軍」（『朝日新聞』1943.5.11～1944.4.25〔全272回〕<sup>(15)</sup>）に関する基本情報を整理していく。

第一に、連載前に掲出された、社告「次の朝刊小説／『陸軍』火野葦平 絵・榎倉省吾」（『朝日新聞』1943.5.4）から参照しておく。

兵隊作家として文壇特異の存在である火野葦平氏は近く本紙上に雄大なる構想をもつて小説「陸軍」を執筆することになった、作者はこの一篇に精魂を傾けて伝統に輝くわが陸軍の全貌を伝へ、その淵源をたづね、強兵の家を語らうとしてゐる、陸軍報道班員として比島攻略戦に参加し敵米英の暴虐非道に痛憤した氏の作家精神は凝つて百鍊彫鏤の文字となることを信ずる、なほ挿絵は陸軍美術協会員榎倉省吾氏が担当する。

ここで紹介される火野葦平とは、「兵隊作家」であり、「陸軍報道班員」であり、それゆえ「陸軍の全貌」を語り得る作家と位置づけられ、そのことが小説「陸軍」を価値づける基底とされる。また、同記事には、次に引く大本営陸軍報道部長・谷萩少将「『陸軍』に寄せる」も並置されている。

火野葦平氏が朝日新聞紙上に小説「陸軍」を執筆するとき、誠に適材適所、然も適時の感深く、その成果を期待してゐる、今や軍民一如、「撃ちてし止まむ」の逞しき精神と実践力をもつて、一日一日を勝ち抜かなければならぬ時、小説も戦力増強に積極的に役立つてこそはじめて決戦下の文学としての意義がある、朝日新聞ならびに作者が「陸軍」なる主題を選んだ理由もこゝに存するものと信じ、決戦下国民必読の文学たるべく、ひたらすら作者の健闘を念じる次第である〔。〕（3面）

このように企図された「『陸軍』なる主題」を担った小説「陸軍」とは、当初から「決戦下国民必読の文学」たることを（良くも悪くも）運命づけられた新聞小説でもあった。また、実弟への1943年3月11日づけの私信には、「『陸軍』の準備をすすめている」、「これまでとはちがった戦争文学を書いてみるつもりだ」、「軍でも支援してくれるというし、任務と思って書く」<sup>(16)</sup>と書かれていたという。火野は、「任務」という枠組みのなかにおいて、新たな挑戦も企図していたのだ。

第二に、『陸軍』先行研究には、戦局の進行をふまえた「陸軍」への論及が散見される。ここで、太平洋戦争の戦局を「四期に区分」した吉田裕の議論を参照すれば、第一期は「開戦から一九四二年五月までの時期であり日本軍の戦略的攻勢期」、第二期は「一九四二年六月から四三年二月まで」で「米軍を中心とした連合軍が反撃に転じ、日本軍との間で激しいしばぜり合いが行われた」、「戦略的対峙の時期」、第三期は「一九四三年三月から四四年七月まで」で「米軍の戦略的攻勢期、日本軍の戦略的守勢期」、そして第四期は「一九四四年八月から四五年八月の敗戦に至るまでの時期」で「絶望的抗戦期」<sup>(17)</sup>とされる。したがって「陸軍」の連載期間は、第三期「日本軍の戦略的守勢期」に重なる。

たとえば、真鍋元之は「陸軍」後半の章にふれながら、「各章〔瓢箪と兵隊〕」「国境」「大空」とともに、それぞれ特異なエピソードが点綴されていて、読者を倦かせるおそれはないが、それでも、全体としての物語の流れが、これらの章にいたっていちじるしい停滞ぶりを示しているのを否むわけにゆくまい」<sup>(18)</sup>という判断を示して、「この作品が朝日新聞に連載されはじめたころの、昭和十八年五月初旬」の戦局について、次のように言及していく。

昭和十八年五月初旬にも、すでに日本の陸軍は、ガダルカナル島からの撤退をやむなくされ、海軍では、連合艦隊司令長官・山本五十六が、墜死の悲劇にみまわっていた。とはいえる、これらは、遠い南洋の彼方での出来ごとであり、内地の住民としては、敗戦の予想に、直接つながってはいなかった<sup>(19)</sup>。

それが、半年後、「翌十九年にいたっては、二月にマーシャル諸島の日本軍が全滅し、六月には、サイパンが陥落した」、「敗戦の恐怖が、内地の国民の心情を、強度におののかせはじめる」。こうした戦局の変化と、「陸軍」執筆時期を重ねる真鍋は、「あたかもこの時期、火野はこの作品の第三部へ、ペンをすすめていた（作品の分量から計算すれば、そういう推測がうまれる）」、「火野はもはや、歴史などには、かかずらっていられなかった」のだとみて、火野の台所事情を次のように推察する。

歴史を通して、必勝の信念を検証すべく、はじめは企図していた火野も、敗戦心理への、急激な国民の傾きを眼のまえにみては、そんな悠長な意図を、いそいで放棄せねばならなかつた。

聖戦完遂の精神を、全国民に鼓吹すべく運命づけられている火野としては、歴史の被幕などを、急遽かなぐり捨て、日本兵士の誠忠ぶりと、不屈不敗の精神を、ナマな現実として、読者のまえに提示しなければならなかつた<sup>(20)</sup>。

つまり、火野は作品の完成度よりも、戦局の変化に応じて、よりストレートに戦局に寄与するメッセージを重視せざるを得なくなつていった、というのが真鍋の見立てである。

もとより、こうした戦局と小説の相關関係は、「陸軍」が連載当初から担っていた条件でもある。村上兵衛は、「火野が、この小説〔陸軍〕の連載を開始した時点では、すでに戦局には敗色が漂いはじめていた」、「連載一年のあいだ、状況はさらに悪化する」と指摘した上で、次のようにつづける。

東條内閣は、ビルマ、フィリピンの独立、東京における大東亜会議など、政治的な動きによって戦意の昂揚をはかろうとするが、航空兵力の懸隔による日本軍の劣勢は蔽うべくもなかつた。とりわけマリアナ海戦（昭和十八年六月）においては、日本の海軍航空兵力は全滅にちかい打撃を受け、いつまでもヨーロッパでは、連合軍はノルマンジー上陸作戦に成功していた<sup>(21)</sup>。

しかも、「陸軍」（ことに第三部）は、この戦争を直接的なモチーフとした小説であり、戦局の進行

が、作家－作品に大きく関わっていたりうことは想像に難くない。

第三として、『朝日新聞』紙上に連載された「陸軍」について、以下、「[「陸軍」連載状況一覧表]」を掲出する。小説本文以外の要素を整理しておけば、挿絵は榎倉省吾（1901～1977、洋画家・挿絵画家）が担当し、挿絵 272 枚とタイトルカット 26 枚が描かれた。ほかに、題字も連載期間を通じて 8 タイプあり、「陸軍考」と題されたコラムが添えられたこともある。

表には、「タイトル（連載回数、章タイトルとその回数）」、「掲載日」を示した上で、「題字」欄には Title Calligraphy を「C」、「タイトルカット」欄は Title cut を「Tc」、「挿絵」欄は Illustration を「IL」と、それぞれ略記し、掲載順にナンバリングした。「その他」には、上記以外の、新聞連載小説枠内に書かれた情報を記載した。

「陸軍」連載状況一覧表

	小見出し・回数	掲載年月日	面	題字	タイトルカット	挿絵	その他 (連載小説枠内の記述)	単行本章題
1	北辺（一）	19430511	4	C01	—	IL001		【序章】 北辺
2	北辺（二）	19430512	4	C01	—	IL002		
3	北辺（三）	19430513	4	C01	—	IL003		
4	北辺（四）	19430514	4	C01	Tc01	IL004		
5	北辺（五）	19430515	4	C01	Tc01	IL005		
6	北辺（六）	19430516	4	C01	Tc01	IL006		
7	北辺（七）	19430517	2	C01	Tc01	IL007		
8	北辺（八）	19430518	4	C01	Tc01	IL008		
9	北辺（九）	19430519	4	C01	Tc01	IL009		
10	北辺（十）	19430520	4	C01	Tc01	IL010		
11	北辺（十一）	19430521	4	C01	Tc02	IL011		
12	北辺（十二）	19430522	4	C01	Tc02	IL012	「陸軍考 最初の観兵式」 (筆者は陸軍省嘱託藤田清)	
13	北辺（十三）	19430523	4	C01	Tc02	IL013	「陸軍考 軍旗」(藤田清)	
14	北辺（十四）	19430524	2	C01	Tc02	IL014		
15	北辺（十五）	19430525	4	C01	Tc02	IL015		
16	北辺（十六）	19430526	4	C01	Tc02	IL016	「陸軍考」都合により中止	
17	三代（一）	19430527	4	C01	Tc02	IL017	挿絵は下関要塞司令部許可済	【第一部】 三代
18	三代（二）	19430528	4	C01	Tc02	IL018		
19	三代（三）	19430529	4	C01	Tc02	IL019		
20	三代（四）	19430530	4	C01	Tc03	IL020		
21	三代（五）	19430531	2	C01	Tc03	IL021		
22	三代（六）	19430601	4	C01	Tc03	IL022		
23	三代（七）	19430602	4	C01	Tc03	IL023		
24	三代（八）	19430603	4	C02	Tc03	IL024		
25	三代（九）	19430604	4	C02	Tc03	IL025	題字は乃木將軍筆蹟 (24～60回)	
26	御変動（一）	19430605	4	C02	Tc04	IL026		
27	御変動（二）	19430606	4	C02	Tc04	IL027		

28	御変動（三）	19430608	4	C02	Tc04	IL028		御変動
29	御変動（四）	19430609	4	C02	Tc04	IL029		
30	御変動（五）	19430610	4	C02	Tc04	IL030		
31	御変動（六）	19430611	4	C02	Tc04	IL031		
32	御変動（七）	19430612	4	C02	Tc04	IL032		
33	丙寅会（一）	19430613	4	C02	Tc05	IL033		丙寅会
34	丙寅会（二）	19430615	4	C02	Tc05	IL034		
35	丙寅会（三）	19430616	4	C02	Tc05	IL035		
36	丙寅会（四）	19430617	4	C02	Tc05	IL036		
37	丙寅会（五）	19430618	4	C02	Tc05	IL037		
38	赤瓢箪（一）	19430619	4	C02	Tc06	IL038		赤瓢箪
39	赤瓢箪（二）	19430620	4	C02	Tc06	IL039		
40	赤瓢箪（三）	19430622	4	C02	Tc06	IL040		
41	赤瓢箪（四）	19430623	4	C02	Tc06	IL041		
42	赤瓢箪（五）	19430624	4	C02	Tc06	IL042		
43	赤瓢箪（六）	19430625	4	C02	Tc07	IL043		筒井箇
44	筒井箇（一）	19430626	4	C02	Tc07	IL044		
45	筒井箇（二）	19430627	4	C02	Tc07	IL045		
46	筒井箇（三）	19430629	4	C02	Tc07	IL046		
47	軍旗（一）	19430630	4	C02	Tc07	IL047		
48	軍旗（二）	19430701	4	C02	Tc08	IL048		軍旗
49	軍旗（三）	19430702	4	C02	Tc08	IL049		
50	軍旗（四）	19430703	4	C02	Tc08	IL050		
51	軍旗（五）	19430704	4	C02	Tc08	IL051		
52	軍旗（六）	19430706	4	C02	Tc08	IL052		花の都
53	軍旗（七）	19430707	4	C02	Tc08	IL053		
54	軍旗（八）	19430708	4	C02	Tc08	IL054		
55	軍旗（九）	19430709	4	C02	Tc08	IL055		
56	軍旗（一〇）	19430710	4	C02	Tc08	IL056		
57	軍旗（一一）	19430711	4	C02	Tc08	IL057		題字は寺内正毅元帥の筆蹟 (61~90回)
58	花の都（一）	19430713	4	C02	Tc09	IL058		
59	花の都（二）	19430714	4	C02	Tc09	IL059		
60	花の都（三）	19430715	4	C02	Tc09	IL060		
61	花の都（四）	19430716	4	C03	Tc10	IL061	題字は寺内正毅元帥の筆蹟 (61~90回)	
62	花の都（五）	19430717	4	C03	Tc11	IL062		花の都
63	花の都（六）	19430718	4	C03	Tc11	IL063		
64	花の都（七）	19430720	4	C03	Tc11	IL064		
65	花の都（八）	19430721	4	C03	Tc11	IL065		
66	花の都（九）	19430722	4	C03	Tc11	IL066		
67	花の都（十）	19430723	4	C03	Tc11	IL067		
68	花の都（十一）	19430724	4	C03	Tc11	IL068		
69	幾山河（一）	19430725	4	C03	Tc12	IL069		

70	幾山河（二）	19430727	4	C03	Tc12	IL070		幾山河
71	幾山河（三）	19430728	4	C03	Tc12	IL071		
72	幾山河（四）	19430729	4	C03	Tc12	IL072		
73	幾山河（五）	19430730	4	C03	Tc12	IL073		
74	幾山河（六）	19430731	4	C03	Tc12	IL074		
75	幾山河（七）	19430801	4	C03	Tc12	IL075		
76	幾山河（八）	19430803	4	C03	Tc12	IL076		
77	幾山河（九）	19430804	4	C03	Tc12	IL077		
78	あの子この子（一）	19430805	4	C03	Tc13	IL078		
79	あの子この子（二）	19430806	4	C03	Tc13	IL079		【第二部】 あの子この子
80	あの子この子（三）	19430807	4	C03	Tc13	IL080		
81	あの子この子（四）	19430808	4	C03	Tc13	IL081		
82	あの子この子（五）	19430810	4	C03	Tc13	IL082		
83	あの子この子（六）	19430811	4	C03	Tc13	IL083		
84	あの子この子（七）	19430813	4	C03	Tc13	IL084		
85	あの子この子（八）	19430814	4	C03	Tc13	IL085		
86	あの子この子（九）	19430815	4	C03	Tc13	IL086		
87	あの子この子（十）	19430817	4	C03	Tc13	IL087		
88	あの子この子（十一）	19430818	4	C03	Tc13	IL088		
89	あの子この子（十二）	19430819	4	C03	Tc13	IL089		
90	あの子この子（十三）	19430820	4	C03	Tc13	IL090		
91	あの子この子（十四）	19430821	4	C04	Tc13	IL091	題字は大山巖元帥の書 (91~120回)	【第二部】 あの子この子
92	あの子この子（十五）	19430822	4	C04	Tc13	IL092		
93	あの子この子（十六）	19430824	4	C04	Tc13	IL093		
94	あの子この子（十七）	19430825	4	C04	Tc13	IL094		
95	あの子この子（十八）	19430826	4	C04	Tc13	IL095		
96	あの子この子（十九）	19430827	4	C04	Tc13	IL096		
97	あの子この子（二十）	19430828	4	C04	Tc13	IL097		
98	あの子この子（二十一）	19430829	4	C04	Tc13	IL098		
99	古い大将（一）	19430831	4	C04	Tc13	IL099		古い大将
100	古い大将（二）	19430901	4	C04	Tc14	IL100		
101	古い大将（三）	19430902	4	C04	Tc14	IL101		
102	古い大将（四）	19430903	4	C04	Tc14	IL102		
103	古い大将（五）	19430904	4	C04	Tc14	IL103		
104	古い大将（六）	19430905	4	C04	Tc14	IL104		
105	古い大将（七）	19430907	4	C04	Tc14	IL105		
106	古い大将（八）	19430908	4	C04	Tc14	IL106		
107	古い大将（九）	19430909	4	C04	Tc14	IL107		
108	大阪城にて（一）	19430910	4	C04	Tc15	IL108		城
109	大阪城にて（二）	19430911	4	C04	Tc15	IL109		
110	大阪城にて（三）	19430912	4	C04	Tc15	IL110		
111	大阪城にて（四）	19430914	4	C04	Tc15	IL111		

112	大阪城にて（五）	19430915	4	C04	Tc15	IL112		
113	獅子頭（一）	19430916	4	C04	Tc16	IL113		
114	獅子頭（二）	19430917	4	C04	Tc16	IL114		
115	獅子頭（三）	19430918	4	C04	Tc16	IL115		
116	獅子頭（四）	19430919	4	C04	Tc16	IL116		
117	獅子頭（五）	19430921	4	C04	Tc16	IL117		
118	獅子頭（六）	19430922	4	C04	Tc16	IL118		
119	獅子頭（七）	19430923	4	C04	Tc16	IL119		
120	獅子頭（八）	19430924	4	C04	Tc16	IL120		
121	獅子頭（九）	19430926	4	C05	Tc16	IL121	題字は奥大将の筆蹟 (121~150回)	
122	獅子頭（十）	19430928	4	C05	Tc16	IL122		
123	軍服（一）	19430929	4	C05	Tc17	IL123		
124	軍服（二）	19430930	4	C05	Tc17	IL124		
125	軍服（三）	19431001	4	C05	Tc17	IL125		
126	軍服（四）	19431002	4	C05	Tc17	IL126		
127	軍服（五）	19431003	4	C05	Tc17	IL127		
128	軍服（六）	19431005	4	C05	Tc17	IL128		
129	軍服（七）	19431006	4	C05	Tc17	IL129		
130	軍服（八）	19431008	4	C05	Tc17	IL130		
131	軍服（九）	19431009	4	C05	Tc17	IL131		
132	軍服（十）	19431010	4	C05	Tc17	IL132		
133	軍服（十一）	19431012	4	C05	Tc17	IL133		
134	軍服（十二）	19431013	4	C05	Tc17	IL134		
135	軍服（十三）	19431015	4	C05	Tc17	IL135		
136	軍服（十四）	19431016	4	C05	Tc17	IL136		
137	軍服（十五）	19431017	4	C05	Tc17	IL137		
138	軍服（十六）	19431019	4	C05	Tc17	IL138		
139	軍服（十七）	19431020	4	C05	Tc17	IL139		
140	軍服（十八）	19431022	4	C05	Tc17	IL140		
141	軍服（十九）	19431023	4	C05	Tc17	IL141		
142	星（一）	19431024	4	C05	Tc18	IL142		
143	星（二）	19431026	4	C05	Tc18	IL143		
144	星（三）	19431027	4	C05	Tc18	IL144		
145	星（四）	19431028	4	C05	Tc18	IL145		
146	星（五）	19431029	4	C05	Tc18	IL146		
147	星（六）	19431030	4	C05	Tc18	IL147		
148	「馬鹿たれ」（一）	19431031	4	C05	Tc19	IL148		
149	「馬鹿たれ」（二）	19431102	4	C05	Tc19	IL149		
150	「馬鹿たれ」（三）	19431103	4	C05	Tc19	IL150		
151	「馬鹿たれ」（四）	19431105	4	C06	Tc19	IL151	題字は桂太郎大将の筆蹟 (151~181回)	
152	「馬鹿たれ」（五）	19431106	4	C06	Tc19	IL152		

153	「馬鹿たれ」(六)	19431107	4	C06	Tc19	IL153		
154	「馬鹿たれ」(七)	19431108	4	C06	Tc19	IL154		
155	「馬鹿たれ」(八)	19431110	4	C06	Tc19	IL155		
156	「馬鹿たれ」(九)	19431112	4	C06	Tc19	IL156		
157	「馬鹿たれ」(十)	19431113	4	C06	Tc19	IL157		
158	山びこ(一)	19431114	4	C06	Tc20	IL158		
159	山びこ(二)	19431116	4	C06	Tc20	IL159		
160	山びこ(三)	19431117	4	C06	Tc20	IL160		
161	山びこ(四)	19431119	4	C06	Tc20	IL161		
162	山びこ(五)	19431120	4	C06	Tc20	IL162		
163	山びこ(六)	19431121	4	C06	Tc20	IL163		
164	山びこ(七)	19431123	4	C06	Tc20	IL164		
165	山びこ(八)	19431126	4	C06	Tc20	IL165		
166	山びこ(九)	19431127	4	C06	Tc20	IL166		
167	山びこ(十)	19431128	4	C06	Tc20	IL167		
168	山びこ(十一)	19431130	4	C06	Tc20	IL168		
169	山びこ(十二)	19431201	4	C06	Tc20	IL169		
170	山びこ(十三)	19431203	4	C06	Tc20	IL170		
171	山びこ(十四)	19431204	4	C06	Tc20	IL171		
172	山びこ(十五)	19431205	4	C06	Tc20	IL172		
173	山びこ(十六)	19431207	4	C06	Tc20	IL173		
174	清流(一)	19431208	4	C06	Tc21	IL174		
175	清流(二)	19431210	4	C06	Tc21	IL175		
176	清流(三)	19431211	4	C06	Tc21	IL176		
177	清流(四)	19431212	4	C06	Tc21	IL177		
178	清流(五)	19431214	4	C06	Tc21	IL178		
179	清流(六)	19431215	4	C06	Tc21	IL179		
180	清流(七)	19431217	4	C06	Tc21	IL180		
181	清流(八)	19431218	4	C06	Tc21	IL181		
182	清流(九)	19431219	4	C07	Tc21	IL182	題字は西郷隆盛の筆蹟 (182~224回)	清流 ※(184) 「三月二十三 日~さうい はれたので あらう。」は 「清流」
183	清流(十)	19431221	4	C07	Tc21	IL183		
184	清流(十一)	19431222	4	C07	Tc21	IL184		
185	清流(十二)	19431224	4	C07	Tc21	IL185		
186	清流(十三)	19431225	4	C07	Tc21	IL186		
187	清流(十四)	19431226	4	C07	Tc21	IL187		
188	清流(十五)	19431228	4	C07	Tc21	IL188		
189	清流(十六)	19431229	4	C07	Tc21	IL189		
190	清流(十七)	19431231	4	C07	Tc21	IL190		
191	清流(十八)	19440101	4	C07	Tc21	IL191		
192	清流(十九)	19440102	4	C07	Tc21	IL192		
193	閣下(一)	19440104	4	C07	Tc22	IL193		

194	閣下（二）	19440105	4	C07	Tc22	IL194		【第三部】 閣下
195	閣下（三）	19440107	4	C07	Tc22	IL195		
196	閣下（四）	19440108	4	C07	Tc22	IL196		
197	閣下（五）	19440109	4	C07	Tc22	IL197		
198	閣下（六）	19440111	4	C07	Tc22	IL198		
199	閣下（七）	19440112	4	C07	Tc22	IL199		
200	瓢箪と兵隊（一）	19440114	4	C07	Tc23	IL200		
201	瓢箪と兵隊（二）	19440115	4	C07	Tc23	IL201		瓢箪と兵隊
202	瓢箪と兵隊（三）	19440116	4	C07	Tc23	IL202		
203	瓢箪と兵隊（四）	19440118	4	C07	Tc23	IL203		
204	瓢箪と兵隊（五）	19440119	4	C07	Tc23	IL204		
205	瓢箪と兵隊（六）	19440121	4	C07	Tc23	IL205		
206	瓢箪と兵隊（七）	19440122	4	C07	Tc23	IL206		
207	瓢箪と兵隊（八）	19440123	4	C07	Tc23	IL207		
208	瓢箪と兵隊（九）	19440125	4	C07	Tc23	IL208		
209	瓢箪と兵隊（十）	19440126	4	C07	Tc23	IL209		
210	瓢箪と兵隊（十一）	19440127	4	C07	Tc23	IL210		
211	瓢箪と兵隊（十二）	19440128	4	C07	Tc23	IL211		
212	瓢箪と兵隊（十三）	19440129	4	C07	Tc23	IL212		
213	瓢箪と兵隊（十四）	19440130	4	C07	Tc23	IL213		
214	瓢箪と兵隊（十五）	19440201	4	C07	Tc24	IL214		
215	国境（一）	19440202	4	C07	Tc24	IL215		国境
216	国境（二）	19440204	4	C07	Tc24	IL216		
217	国境（三）	19440205	4	C07	Tc24	IL217		
218	国境（四）	19440206	4	C07	Tc24	IL218		
219	国境（五）	19440208	4	C07	Tc24	IL219		
220	国境（六）	19440209	4	C07	Tc24	IL220		
221	大空（一）	19440211	4	C07	Tc24	IL221		大空
222	大空（二）	19440213	4	C07	Tc24	IL222		
223	大空（三）	19440215	4	C07	Tc24	IL223		
224	怒濤（一）	19440216	4	C07	Tc25	IL224		怒濤
225	怒濤（二）	19440218	4	C08	Tc25	IL225	題字は山縣有朋元帥の筆蹟 (225~272回)	
226	怒濤（三）	19440219	4	C08	Tc25	IL226		
227	怒濤（四）	19440220	4	C08	Tc25	IL227		
228	怒濤（五）	19440222	4	C08	Tc25	IL228		
229	怒濤（六）	19440223	4	C08	Tc25	IL229		
230	怒濤（七）	19440225	4	C08	Tc25	IL230		
231	作者恐識	19440226	4	C08	Tc25	IL231		堪忍袋
232	新博多町（一）	19440227	4	C08	Tc26	IL232		新博多町
233	新博多町（二）	19440229	4	C08	Tc26	IL233		
234	新博多町（三）	19440301	4	C08	Tc26	IL234		
235	新博多町（四）	19440303	4	C08	Tc26	IL235		

236	新博多町（五）	19440304	4	C08	Tc26	IL236	
237	新博多町（六）	19440305	4	C08	Tc26	IL237	
238	新博多町（七）	19440307	4	C08	—	IL238	
239	新博多町（八）	19440308	4	C08	—	IL239	
240	新博多町（九）	19440310	4	C08	—	IL240	
241	新博多町（十）	19440311	4	C08	—	IL241	
242	新博多町（十一）	19440312	4	C08	—	IL242	
243	岬（一）	19440314	4	C08	—	IL243	
244	岬（二）	19440315	4	C08	—	IL244	
245	岬（三）	19440317	4	C08	—	IL245	
246	岬（四）	19440318	4	C08	—	IL246	
247	岬（五）	19440319	4	C08	—	IL247	
248	岬（六）	19440321	4	C08	—	IL248	
249	岬（七）	19440322	4	C08	—	IL249	
250	岬（八）	19440324	4	C08	—	IL250	
251	岬（九）	19440325	4	C08	—	IL251	
252	岬（十）	19440326	4	C08	—	IL252	
253	岬（十一）	19440328	4	C08	—	IL253	
254	岬（十二）	19440329	4	C08	—	IL254	
255	岬（十三）	19440331	4	C08	—	IL255	
256	岬（十四）	19440401	4	C08	—	IL256	
257	岬（十五）	19440402	4	C08	—	IL257	
258	岬（十六）	19440405	4	C08	—	IL258	
259	岬（十七）	19440407	4	C08	—	IL259	
260	岬（十八）	19440408	4	C08	—	IL260	
261	岬（十九）	19440409	4	C08	—	IL261	
262	岬（二十）	19440411	4	C08	—	IL262	
263	岬（二十一）	19440412	4	C08	—	IL263	
264	岬（二十一）	19440414	4	C08	—	IL264	
265	南十字星（一）	19440415	4	C08	—	IL265	
266	南十字星（二）	19440416	4	C08	—	IL266	
267	南十字星（三）	19440418	4	C08	—	IL267	
268	南十字星（四）	19440419	4	C08	—	IL268	
269	御遺族様（一）	19440421	4	C08	—	IL269	
270	御遺族様（二）	19440422	4	C08	—	IL270	
271	御遺族様（三）	19440423	4	C08	—	IL271	
272	御遺族様（四）	19440425	4	C08	—	IL272	

岬

南十字星

【結章】  
御遺族様

### 3. 単行本化に際しての加筆修正

戦時下に連載された「陸軍」は、単行本化に際して加筆修正を施される。そのことに最初に言及したのは、火野自身である。火野葦平「後書」（『陸軍』朝日新聞社、1945）には、次の二節がある。

小説「陸軍」はいろいろな意味で私には忘れられないものであるが、作品としてはたしかに不備をまぬがれない。種々の事情に煩はされて、首尾一貫しなかつた部分もある。終りに近づく頃、印緬作戦に従軍を命ぜられ、「作者恐識」といふ一回を書いて、途中を三十回分も抜いたり、出発が近づいたため、最後の方を端折つてしまつたりした。これは本にするに際して書き加へ、書き改めた。また校正の折に全般にわたつて少からず書きなほした。作品について作者がとやかくいふことは控ふべきであるが、この作品を書くに当つての私の心がまへの一つとしては、この書が読んで下さる人々のどのやうな階層にもわかつて欲しいといふことであつた。(683 頁)

この発言に即して、あるいは、この発言を鵜呑みにして、各種解説・先行研究では『陸軍』について不正確な書誌情報が連綿と印刷されてきた。『陸軍』を「太平洋戦争下に書かれた、おそらく唯一の壮大なロマン」だと評価する安田武は、同作について次のように紹介している。

小説『陸軍』は、昭和十八年五月一日から「朝日新聞」に連載され、途中、火野のインパール戦従軍をさし挟んで中断され、翌十九年の四月に至つて完結した。連載完結後、火野は、更に多くの筆を加え、単行本として朝日新聞社から出版される筈であったが、印刷納本を終つて、それが正に市販されようという時、戦争は終つた<sup>(22)</sup>。

連載状況について正しておけば、「陸軍」の連載開始は正しくは5月11日からである。あわせて気になるのは、「中断」の一語である。火野が執筆を中断した時期があった、ということなら首肯されるが、(時折の休載をのぞき)新聞連載が中断されたという事実はない。

文庫版『陸軍』に付された「解説」において、村上兵衛は「この長篇は、兵隊作家として知られる火野葦平が、大東亜戦争のさなか、昭和十八年五月一日から翌十九年四月二十五日にかけて『朝日新聞』に連載した新聞小説」<sup>(23)</sup>だと、子安宣邦も『陸軍』を「昭和十八年五月から同二十年四月まで、二年間にわたつて朝日新聞に連載された長編小説」<sup>(24)</sup>だと紹介しているが、正確な連載開始日は1943年5月11日、連載終了日は1944年4月25日である。

これらは、現物を確認せず、あるいは先行研究に倣つたまま書誌を記載したものとみられる。

以下、火野が「後書」において「本にするに際して書き加へ、書き改めた」、「また校正の折に全般にわたつて少からず書きなほした」と述べた、初出／単行本間の異同を検証していく。ただし、句読点や鉤括弧の増減、改行の有無、漢字／かな表記などは多すぎて煩瑣になるので、ある程度、意味上の変化が明らかな箇所に限ることとする。なお、初出から単行本化した際に、削除された箇所は〔 〕で囲み、加筆箇所には下線を付し、初出の小見出し・掲載日と単行本掲載頁を記載し、補足は※で付記した。

### 3-1

①「陸軍（7）北辺（七）」（1943.5.17）／18頁

よい兵隊なのであるが、〔動作が緩慢〕すこし勘がにぶいので、ちょっと間にあひかねるところがあるからであらう。

この快活な加島一等兵の姉婿も出征してゐるのであるが、出て以来、半年ちかくにもなるのに、まったく消息がわからないといふ。ただ、おぼろに、南の方とだけわかつてゐる。ときどき戦友がたづねると、「まあだ、わからんが、もう、おほかた九段住居ぢやろうで」などと、こともなげにいひする〔。その投げやりな語調には、一種のすさまじさがあつた〕のである。加島にはまた兄が二人あるが、次兄の方が秋人の兄伸太郎と現役時代の同年兵だと話したことがある。明瞭でない

が、どうもさうらしいといふのである。

②「陸軍（9）北辺（九）」（1943. 5. 19）／22頁

小隊長は死ぬつもりなのだ。戦闘のなかで、弾丸を受けて死ぬばかりが、兵隊の唯一の死ではないと、いましめてゐる。〔いかなる場所においても、その精神を高くみなぎらし、一身をただ大君にささげまつる一念に徹して居れば、いつでも兵隊の死は美しいのだ。通じて、たどりつく道は同じなのだ。その一つの道のために兵隊は生きてゐる。〕小隊長は大切な冬期訓練に自分の精魂をかたむけつくせば、たとへ、自分はいまたふれても、〔小隊長〕自分の気塊は、兵隊たちのなかに残つて生きると信じてゐるのだ。

③「陸軍（10）北辺（十）」（1943. 5. 20）／23頁

秋人は父の言葉を思ひだ〔した。〕す。「派手に手柄を立てることばかり考へたり、死んで名をのこさうなどといふ考へは、ほんたうの臣民の心ではない。名を殺し、おのれをむなしくして、無のなかに一切を没入するのが草莽の志だ」

④「陸軍（10）北辺（十）」（1943. 5. 20）／24～25頁

士官学校といふところは、いつたいどういふ教育をしてゐるのだろうと、秋人はときどき首をひね〔つた。〕ることがある。父友彦も古い陸士出身の退役大尉である。いま、国軍の中堅といはれてゐる叔父久彦は、陸士から陸大を出た人である。近くは、兄の礼三も士官学校を出た。

⑤「陸軍（11）北辺（十一）」（1943. 5. 21）／27頁

顔がいたいほど冷たくなつて来るなかに、秋人は〔星空を睨んで立つてゐた。遠くの犬の鳴き声が、ひとつの言葉にかはつた。〕

「ここで、死ね。ここで、死ね」

たれの声でもなかつた。とどろくごとく、また沈むがごとき声であつた。〕胸を張るやうにして、前方を睨んで立つてゐた。

⑥「陸軍（15）北辺（十五）」（1943. 5. 25）／35～36頁

「そら、さうと、〔森さんとこの〕澄しやんな、どげんしなしたな？」

「澄しやんて？」

「澄江さんくさ。あげん、白ばくれとる。……あたきが出る時、あんたのお父〔ちやん〕はんな、澄しやん〔は〕ば、あんたの嫁御に貴はうかいて、話しござりよつたが」

「知りません」

「知〔りませんちゅうたち、まんざらでもなからうもん。澄しやんな、口癖のごと、あんたが好きでたまらんて、いひよんしやつたばい。〕らんとな。澄江しやんの姉さんの芳江さんが、伸太郎君の奥さんぢやけん、けようだい同士でよからうもん。……ちつた、便りでもあるな」

「ときどきあります」

「〔そら、帰つたら、貴はにやこて〕澄しやんな、ええ氣立のひとぢやけん、あんたには、ちょうど、よかばい」

⑦「陸軍（32）御変動（七）」（1943. 5. 27）／79頁

奇兵隊の戦闘精神の旺盛さと、軍紀の厳正さとを見て、友之丞は、自分の行動はあやまつてゐな

かつたといふ確信を得た。

〔四民皆兵〕

〔さうして、大君への忠誠に燃える軍隊〕これこそ、眞の日本人の軍隊であると思つた。〕

彼は、小野田の引きあはせで、山県狂介や、前原一誠などといふ人たちを知つた。

⑧「陸軍（57）軍旗（一）」（1943.7.11）／138頁

友彦の頭のなかに、櫟木の肩車にのつて、軍旗祭に行つたときのことがうかんだ。

軍旗のうつくしさとともに、その尊厳さと、その旗にむすびついた兵隊のこころとが、少年〔の〕友彦の胸にも〔、〕じんじんと電気のやうにつたはつて来る思ひがした。〔すると、耳の底に、幼いころしみついた「ヒツ、 ゲンジンハ」「ヒツ、 ゲンジンハ」といふ声が、そこに聞くやうにひびいて来た。〕

⑨「陸軍（67）花の都（十）」（1943.7.23）／161～162頁

広場の方へさがつて来て、人力車をよびとめた友彦は、いつたん病院の場所を告げたが、ふと思ひかへして、靖国神社へ行くやうにいひなほした。九段坂の下〔で車を降りた。〕まで来ると、立ちん坊がみて、車のあとを押さうかといつた。相当に急な勾配なので、さういふう商売ができるるわけであらう。友彦は車を降りて、歩いて、

〔かるい勾配の〕坂をのぼつた。紺碧の空にはめこんだやうに青銅の大鳥居がそびえてゐる。

⑩「陸軍（73）幾山河（五）」（1943.7.30）／176頁

「今度は、旅順はなかなか手ごはいごとあるですな。日清のときには一日で落ちたとに、今度は、なんべん総攻撃しても、〔犠牲ばかり出て、〕なかなか陥落せんらしうりますが〔……〕」

⑪「陸軍（85）あの子この子（八）」（1943.8.14）／207～208頁。

ワカは、眼ばたきもせず、伸太郎の顔を見まもつてゐた。時間が長いのか短いのかわからなかつた。階下の時計が一度鳴つてから、あとが長時間経つても鳴らないやうに感じられるかと思ふと、いま鳴つたのに、もう鳴つたと思はれるときもあつた。

⑫「陸軍（90）あの子この子（十三）」（1943.8.20）／220頁

庭の中央には瓢箪池（乃木さんの赤瓢箪の形によつたのである）を掘つた。残つたところは野菜畑にした。杉垣に添つて、稻荷の祠があり、赤い鳥居が五つ、くつついて立つてゐた。これはワカがねだつて作つたものである。

⑬「陸軍（111）大阪城にて（四）」（1943.9.14）／270頁

太い眉のあはひに不屈の決意のいろをただよはせて、ぽつりぽつりと語る弟を、友彦はふり仰ぐ思ひで見た。これが自分の弟かと、ふとそんな〔気持がわく〕錯覚がおこる。

⑭「陸軍（123）軍服（一）」（1943.9.29）／298頁

昭和六年二月一日、伸太郎入営。

青い濠の水を左右に見てゆくと、城壁につきあたつて、大手門にはいるが、大勢の人たちがぞろぞろと行く列のなかに交つて歩きながら、友彦はなぜともなく、何年か昔に、弟久彦と大阪城で会つたときのことを思ひだしてゐた。

## ⑯「陸軍（193）閣下（一）」（1944. 1. 4）／471～472頁

謙朴は団栗眼をきよろつかせて〔，〕はがゆさうにいつたが、彼はいまだ先見の明があつたとはいへまい。漢口が落ちても〔，〕なほ戦争がつづくであらうなどといふことは、〔気の短い〕視野のせまい漢法医には想像もつかぬことであつたからである。

『それがくさ、支那のうしろに、アメリカ、イギリス、なんちゅう第三国がをつて、尻押しばしとするけんたい』

どこで聞いたか、したり顔で「筑前屋」がそんなことをいつた。

これら①～⑯に関する本文異同は、主に表現の変更、登場人物やその関係性についての補足情報などであった。いずれも、初出に書かれたことが大きく変更されることではなく、複数箇所に渡って注目されるのは、兵隊に関する削除・加筆・修正である。日本近代における陸軍をモチーフとした「陸軍」において、兵隊の思想（心構え、生き方・死に方）が主題であることは明らかである。

## 3-2

ここでは、初出「陸軍」において、最もイレギュラーなパートの異同を検証しておく。「陸軍」連載中の1944年3月8日、日本軍はインパール作戦を開始するが、火野葦平は同作戦に従軍することになる。「年譜」には、「報道班員として従軍を命ぜられ、向井潤吉画伯、作曲家小関裕而氏と三人、飛行機で、四月二十九日、ビルマのラングーンに着く。インドのインパール戦線から、雲南、フーコン地区に廻り、九月九日、帰国」<sup>(25)</sup>と記されている。（これが、以下に引く「作者恐識」で言及された「ある事情」に該当する）。このことへの対応として、火野は特別回を設けた。まずは、全文を次に引く。

## ⑯「陸軍（231）作者恐識」（1944. 2. 26）

作品の途中で、作者が顔をだすことは、本意ではありませんが、やむを得ませんので、おゆるし願ひます。小説「陸軍」は、ある事情のために、すこし早く終らねばならなくなりました。そこで、終りの方を切つて、尻きれ蜻蛉になるのは、残念でありますから、途中を、若干、抜きにいたしたいと考へました。それで、「怒濤」の章と、次章「新博多町」とのつながりが、やゝ唐突になりますが、この二章の間に、それを補ふべき三十回ほどがあることを御諒承ねがひたいのであります。

その三十回ほどのなかに、私が書きたいと思つて居りましたのは、だいたい、つぎのやうなことです。

○十二月二十二日、比島攻略軍主力、リンガエン湾進入、上陸。その状況、戦闘。

○マニラ攻略にいたるまでの全般的作戦のうごき。アバリ、ビガンの南下部隊は、主力と合し、主力はカバナツアンに迂廻し、一隊はタルラツクを衝き、おのの、サンフェルナンドを経て、マニラ攻略を目指した。南部ルソンのラモン湾上陸の北上部隊も、一路、マニラへむかつた。この進撃を阻止せんとする敵とのはげしい戦ひ。アグノ川の線における死闘。敵は、年末ごろより、バタアン半島へ入りこみはじめた。

○正月元日には、マロロス、ビギン、サン・ホセ、ベルモントの線。タルラックの激戦で、上陸部隊は部隊長を失つた〔。〕

○一月二日、マニラ陥落。一部の兵力をもつて、正午、マニラ入城。

○バタアン攻撃開始。園田戦車部隊の猛進撃、敵カルンピットの鉄橋破壊。工兵隊は二十四時間労働を連日つづけて、十四日目に、やつと、大砲、戦車、自動車をわたした。

○パコロール、バロックで激戦。

○このとき、軍ははなはだしい困難に逢着した。主力を蘭印作戦へ転用しなくてはならなくなつたのである。ヘルモサの線に達したとき、部隊は、交替、反転した。

○この為に、代つてバタアンを攻撃にあつたのは、守備隊勢をもつて上陸した兵団となつた。元日にリンガエンに上つた兵団は、炎天下、徹夜兼行、二百四十キロを一週間の強行軍をもつて、バタアンに到着し、疲労の回復せざるうちに、敵の堅陣地にぶつかつた。ナチブ山攻撃は凄烈な戦闘となり、死傷続出した。

軍司令官はバタアンが落ちるまではマニラに入城しないとて、司令部にあつて、指揮にあつた。局面打開のための困難な作戦指導。友枝中佐は、しばしば、バタアンの最前線に出た。

○敵兵力不明。地形の複雑。ふかいジャングル。敵砲兵は、昼夜のわからなく、豊富な弾薬をもつて、猛砲撃をして來た。

○平地方面の戦闘、効果あがらず密林の山地にはいつた。くりかへされる死闘。

○一月十日。オロンガボ占領。道なき道、千古の密林を縫つてモロンに進出。二十日、バガック進撃。

○高木伸太郎の所属した時川部隊は、リンガエン湾バクノタンに敵前上陸をした。はげしい敵の抵抗によつて、若干の損傷を受け爾後、中部ルソンをカバナツアン道へむかひ、ビナロランに露営。バタアンに入ると、アブカイ戦闘に参加して、兵力の半をうしなつた。中隊長澤村中尉も、そのとき、戦死した。小隊長も戦傷し、軍曹の伸太郎は、小隊の指揮をとらねばならなくなつた。南支増城で負傷した伸太郎は、すつかり、恢復してはゐなかつたが、比島攻略軍へ決死の従軍嘆願をしたのである。のち、時川部隊は、バタアン西岸作戦にしたがひ、オロンガボを経て、舟艇によつて、モロンに上陸した。そこの第一線で、敵と対峙した。

以上が「怒濤」と次章との間にはさまるべきものでありました。(4面)

上に火野が示した概要は、単行本において具体的に加筆－展開される。ただし、「三十回ほど」と火野が述べていた分量に関しては、実際は、3.5回分ほどである。「堪忍袋」という小見出しのもと、上記概要に即して書かれた単行本本文（全文）も、次に引いておく。

#### 「堪忍袋」564～572頁

十二月二十一日、主力部隊はリンガエン湾に進入した。一隻の輸送船が潜水艦に撃沈された。ところが、大した波はないつもりのリンガエン湾はひどい荒波が立ちさわぎ、上陸ははなはだしく遅滞した。第一回の上陸部隊は上陸することができたが、舟艇は海浜にうちあげられてしまつて帰つて来ない始末である。先遣部隊は敵と激戦をし、爾後の上陸をよく掩護した。やがて、揚陸が終り、アパリ、ビガン方面からの南下部隊と合することができた。

主力はカバナツアンに迂回し、一隊はタルラツクを衝いた。二十四日南部ルソンのラモン湾に上陸した部隊も一路北上して、マニラを目指した。このころから敵将マツクアーサーはバタアン半島に逃げこむ算段をしてゐたやうである。それは米西戦争の経験にもとづいたのと、コレヒドールを守るためにもあつた。もともと敵の比島常駐軍は一万余にすぎなかつたのであるが、日米会談の風雲をはらんで、七月ごろから大動員を行ひたちまち十個師団以上も編成してゐた。リンガエン方面にはマテオ・カピンピン将軍を長とする二十一師と九十一師とが守り、わが軍の進撃に会つて逐次退いた。アグノ川の線においてははげしい戦闘が行はれた。四十一師、五十一師はマニラ防禦のために備へられ、三十一師はじめからバタアン南端マリベレス軍港の附近に居たやうである。これは敵にはとつておきの部隊であつたやうだ。あとでわかつたのであるが、全軍に一月二日までにバ

タアン半島に入れといふ命令が發せられてゐた。

暑い比島にも、霜の降りる場所がある。バギオである。嘗て日本人苦闘のたまものによつて完成されたベンゲット道路のあるところで、神崎部隊は機をうつさずこれを占領した。北部ルソン地区の司令官であつたホーラン大佐は逃げてばかりゐるので、比島兵の捕虜が苦笑して、「あれは Colonel who run だ」といつたほどである。

タルラツクの激戦で上島部隊長は戦死を遂げた。

「敵をバタアンの堅壁に入れるのは得策でない。中部ルソンの平地で捕捉殲滅すべきである」

さういふ意見を持つてゐる部隊長や幕僚もあつたが、さまざまの関係からこれを阻止することができなかつた。年末ごろから、敵軍はサンフェルナンドを経てぞくぞくとバタアン半島にはいりはじめた。

「どこで正月になるかな」

「正月まで命がありやええがな」

戦地でむかへる元日は兵隊に心にしみる郷愁をさそふのである。

「お前みたよな大食ひに餅も雑煮もないお正月は可哀さうぢやな」

追撃をするトラツクのうへで、橋本上等兵は島田一等兵をひやかす。

「うん、可哀さうばい」島田はけつして反撃をせずになんでもすなほに返答するのである。

「班長殿、傷は大丈夫ありますか」

「うん、なんともない」

「無理しなさらんがええですよ。と、いうたところでもう仕様がないですなあ」

長谷川一等兵はだらだらとながれる汗を戦帽のたれでぬぐひながら、

「班長殿、さつき出発するときに休憩しとつて聞きましたんですが、ビナロラン攻撃のときに、一人で戦車をぶんどつた兵隊が居りましたさうであります。それが奇抜なことにや、嘘みたよな話でありますな、敵の戦車がやつて來たので、その兵隊が手榴弾を持つて戦車にとびあがつたさうです。そしたら、どこからか弾丸がとんで来て、顔をやられて戦車のうへにうつぶせにたふれた。そしたら下から鉄蓋が持ちあがつて敵兵が出て來た。その兵隊は眼をやられて、眼の玉がとびだしてをつたさうですが、自分の眼玉をひきちぎつて敵兵の顔にぶつけたんです。それが敵の奴の眼にあたつて、敵の奴、眼をましましてな、ひつくりかへつて地べたに落ちて死んだといひます」

「その敵兵の眼玉がまた飛びだしたのとちがふかい」橋本がきく。

「まじめな話でありますよ」

西村一等兵はすこし不機嫌になる。みんなどつと笑つた。

元日には首都、マニラを望んで、部隊はマロロス、ビギン、サン・ホセ、ベルモントの線にあつた。敵は勝手のよい無防備都市宣言などをした。

正月二日、正午、マニラは占領され、星条旗が下されて、日章旗がひるがへつた。入城と同時に監禁されてゐた在留邦人はすべて救ひだされた。

バタアン半島攻撃がはじめられた。園田戦車部隊は猛撃をした。やがて戦ひは予想以上の困難さをあらはした。バタアンは東西二十五キロに、南北五十キロほどの小半島で、マニラ湾を扼してつき出してゐるが、海辺の一部をのぞいて深い密林によつて掩はれ、ナチブ、サマット、マリベレス、オリオン、リマイなどの峻険をもつて中央を貫かれてゐる。敵はつねにここを演習地としてゐたので地理に詳しかつたが、わが軍は初めのころは満足な地図もなかつた。敵がカルンピットの鉄橋を爆破したので、諸部隊は前線へ到達するのに手間どつた。工兵隊は二十四時間労働を連日つづけて、十四日にやつと大砲、戦車、自動車をわたした。バクロール、バロツクの線で激戦が行はれた。

このときに、軍はひとつの苦難に逢着したのである。精銳な主力兵を蘭印作戦に転用しなければならなくなつたのである。もとより覚悟のことではあつたけれども、いますこしの時期が欲しかつた。

「もう一月だつたなあ」

友枝中佐はサンフェルナンドの軍司令部の庭を散歩しながら、何度もつぶやいた。強烈な太陽にまぶしいばかりあたりは明るい。マンゴの並木が鉄柵のそとにあつて茂つた緑の葉が艶々して光つてゐる。垣に添つて、桃色の小粒なカデラ・デ・アモルや、<sup>グメマラ</sup>仏桑華やボカンビリヤなどが眼にいたい赤さで咲いてゐる。それらの絢爛たる花々の間に、ひそかに清楚なサンパ・ギタの白い花が芳香をはなつてゐた。

「トモダチ、マンゴ、マンゴ」

垣のそとから、色の黒いフイリピン娘がまつ黄色なマンゴの実を籠に山盛りにしてのぞいてゐた。すこしづつ住民が帰りかけてゐるときで、兵隊を見さへすれば「トモダチ」などといつた。支那では「先生」であつた。<sup>シーラン</sup>兵隊の多くは支那の戦場からやつて來たので、フイリピン人をつかまへては、「不行不行」とか「漫々的」「快々的」などといつて面くらせてゐた。友枝はマンゴを一つ買つた。皮をむいて嚙つた。ねつとりとした甘さである。手に黄色い汁がついてハンカチで拭いても落ちず、ハンカチが黄色く染つた。

河口参謀が出て來た。二人は椰子の木の蔭にはいつて話をした。

「軍司令官閣下もお苦しいらしく見うけられる」と、河口少佐は葉巻の口を切りながらひくい声でいつた。司令官はバタアン陥落の日まではマニラに入らないといふ決意であつた。

「さうだろう」

「どうする」

「どうするつて、攻撃続行だよ」

「部隊は」

「原兵团」

河口少佐は答へなかつたが、顔をあげて司令部の建物の尖塔をあふいだ。

「友枝、面白いもんだね。この建物は今度の戦争で三度、軍司令部になつたさうだよ。はじめは米西戦争、つぎは、アギナルドの叛乱のとき、それから今度の大東亜戦争」

「ほう」

「勝利の家だとこの町の顔役のやうな男が話してゐたよ」

「マライやビルマの方はどんどん進んでゐるやうだね」と友枝はほかのことをいつた。

元旦にリンガエン湾から上陸した原兵团は、炎天下、昼夜兼行、二百四十キロを一週間の強行軍をもつてバタアン前線に到達した。この部隊は守備隊として予定されてゐたので装備の点においては十分といふことができなかつたが、士気はきはめて旺盛で、ヘルモサの線で主力兵团と交替すると、いまだ疲労も回復しないうちに、ただちに敵陣地の攻撃に移つた。激戦は相ついだ。敵は昼夜のわかつなく猛砲撃をして來た。平地の戦闘では思ふやうに効果があがらないので、密林の山地に入つた。死闘がくりかへされた。複雑な地形のために、敵味方の陣地は元禄模様のやうに入りみだれることがある。「密林は兵を呑む」といはれる。広池部隊はナチブの渓谷にはいつて、一週間以上も連絡が切れたことがある。食糧も弾薬も尽きた。どこの谷に入つたか飛行機で偵察しても、密林の海のためよくわからない。兵隊が百数十尺の樹上にのぼり日章旗をひろげた。出征のときに贈られたものであらう。いちめんに字が書かれてゐるのを飛行士は見た。そこを目あてに食糧弾薬を投下しに行つた。あまり低く降りると敵火の損害を蒙るので、やや高いところから落すと、狭い谷などではなかなかうまく目的の場所に到着しない。折角のものを敵にあたへる始末である。やつと四

日目に、つまり十一日目に、九十九人分といふ食糧が部隊の位置に落ちた。それは兵数からいへば一人いくらにもあたらぬものである。しかし広池部隊長はその苦心に感激して、すぐに「只今食糧受領ス感謝ス」といふ連絡をした。原兵团長も、やつと届いたかと涙を落した。かういふことは広池部隊のみでなく、山中の幾多の戦闘でくりかへされてゐたのである。さうして困難な戦闘をつづけながら、逐次、敵の陣地を圧迫していくつた。

食糧に欠乏すると兵隊たちは水牛をさがしに行つた。さうして、見つかると金を払つて来た。その男が持ち主かどうかわからなかつたが、その近くにある住民に無理に金をにぎらせた。掠奪をけつしてしないときめてゐるからである。敵の猛烈な砲撃は附近の樹々を裂き、竹林を薙たふした。半分から上はずらりと折れて頭を地につける。わが損害も少くなかつた。ときには牛も砲弾にやられ、またいたるところに埋められてある地雷を踏んで爆死した。いたるところの部落には不似合に大きな教会堂がある。大部分が基督教徒である比島兵は教会堂は照準しないといふことであつたけれども、力量不足と、死にもの狂ひとのために、それらの教会堂もほとんど破壊され、部落は廃墟と化した。敵はさかんに放火をするので、難民があふれた。

一月十日、オロンガポ占領。モロンには相当の敵があつた。陸は湿地帯で通れない。千古の密林がつらなり、簡単に道をつけることもできない。二人乗りカヌーなども加へて、海路を行つた。

マヤガホ岬から上陸して、モロンを衝いた。わづかに二千米くらゐのところを四日もかかるやうな地形である。このとき、敵は西海岸司令官ホスキン少将を失つた。モロンを得た部隊はただちにバガツクにむかつて進撃した。ハムタン川の線で敵とぶつかつた。

サマット山、カポット台等の敵の堅陣地にむかつて、反復攻撃が加へられたが、思ふやうに進捗しなかつた。死傷続出して、戦局は重大な場面におちいつてゐた。

高木伸太郎の所属した時川部隊はバタアン西海岸作戦にしたがひ、モロン占領以来、最前線で敵と対峙してゐた。時川部隊は南支那から比島作戦に加へられ、リンガエン湾バクノタンに敵前上陸をした。敵の頑強な抵抗によつて若干の損傷を受け、爾後、中部ルソンを南下し、ビナロラン、カバナツアンを経て、バタアンへ向つた。アブカイ攻撃は上陸以来の激戦で、兵力の三分の一に近いものを失つた。中隊長澤村中尉は戦死し、小隊長は戦傷して、伸太郎は小隊の指揮をとらねばならなかつた。自分の分隊の兵隊も數名たふれると、「くそう、堪忍袋の緒が切れたぞ」と叫んで、敵のなかに躍りこんだ。小隊員はそれにつづき、敵陣地は占領された。増城での負傷がまだほんたうに恢復してはゐなかつたのであるが、伸太郎は比島攻略戦へ必死の従軍嘆願をしたのである。

「班長はふだんはおとなしいけんど、堪忍袋の緒が切れるとはげしいですな」

橋本上等兵がいふのに苦笑しながら、伸太郎は母のことを思ひだしてゐた。

以上、「陸軍（231）作者恐識」で示された梗概は、日付や地名を基準として戦局の推移を示したものだったが、単行本では「堪忍袋」という小見出しに改められ、梗概をベースに肉付けするかたちで全面的な加筆が施されている。とりわけ、上記引用の終盤で展開された、伸太郎が指揮をとつての奮戦ぶりに関わる加筆が顕著である。ここでも、“兵隊の思想”が主題とされている。

### 3-3

ここでは、初出版での連載2回分を、単行本化に際して順序を入れ替えて再構成したパートを⑩として検証しておく。該当するのは、「陸軍（232）新博多町（一）」（1944.2.27）と「陸軍（233）新博多町（二）」（1944.2.29）である。

まず、「新博多町（一）」を、A「日のあるうちに炊爨をすると、～今度は火を見せないやうにしなけ

ればならない。」と **B**「ひつきりなしに、鳥が啼く。～橋本上等兵が笑ひながらいつた。」に、「新博多町（二）」を、**C**「月光は交錯した梢のあひだを縫ひ、～あたりは、無気味な静寂に満ちてゐる。」と **D**「このあたりの密林は、昼でも小暗くて、～盲砲撃をはじめろと思つてゐた。」に分割する。

これが単行本化された「新博多町」（573～577頁）では、**A⇒D⇒C⇒B** の順に入れ替えられている。初出2回分には、大きな時間や場面の展開がないため、こうした再構成が可能となっている。

### 3-4

最後に、「陸軍」-『陸軍』終盤の加筆修正について、検証しておく。

⑯「陸軍（265）南十字星（一）」（1943.4.15）／652頁。

また、自責であり、すまなさであり、さびしさであつた。泣くまいと思つても〔，〕涙があふれた。

〔陸軍軍曹高木伸太郎の馬鹿たれ〕

自分を叱咤するやうに、ときどき声を殺してどなつてみても、どこにつきあつたかわからない空虚な山びこが闇のなかから刎ねかへつて来るばかりである。

このマニラ陸軍病院には〔，〕ほとんど〔，〕強請的につれて来られた。

⑰「陸軍（266）南十字星（二）」（1944.4.16）／652～658頁。

マササ岬で激戦中、伸太郎は〔，〕とつぜん〔，〕時川部隊長に呼ばれてモロンへ連絡に帰る命令を受けた。上陸以来、三日目の〔夜〕夕刻であつた。〔おどろいたが、部隊長としては、この重要な任務を遂行し得る者は、高木軍曹よりほかにはないときめた上でのことであつた。〕はじめはなにかの間違ひではあるまいかとおどろいた。時川少佐はすでに数箇所に負傷をしてゐたが、繩帯につつまれた顔のなかから、きびしい眼がじつと伸太郎を見てゐた。またその眼は掩ひがたい部下への信頼の色をもたたへてゐた。もともとぶつきらぼうなほど口数の少い部隊長である。そのときも必要な命令のほかにひとつ無駄なことをいはなかつたのに、伸太郎は部隊長の眼のなかに、部隊長が自分を選んだ気持をはつと受けとめた。この大切な任務を果すことのできる者はお前よりほかにはないと、言葉ではないものがはつきりといつてゐた。ごくりと伸太郎は唾をのみこんで、命令を復唱した。無電機〔が〕の〔どうしても〕修理が〔どうしても〕できない〔から〕のである。〔伸太郎は、心をのこして、ただ一人〕夜になつてマササ岬を〔あとにした〕出発した。まだ〔，〕熱があつた。〔陸路をゆくことはできないので、海を泳いで行つた。簡単な筏をつくつて、それにすがり、荒海をわたつた。困難な海上の進行がはじまつた。いくたびか危険にさらされて、やうやく、四日目に、モロンにたどりついた。しかし、そのときは、もう身体は疲労の極に達してゐて、人事不省におちいり、海岸にうちあげられて來たのである。〕雑木を伐つて、簡単な筏をつくつた。陸路は敵に満たされてゐるので、海をいくことにしたが、泳ぐことはなかなか困難なので、浮標がはりに小さな筏を組んだのである。銃を負革で背にした。十個ほどの乾麵麺のほか、食糧はなかつた、橋本や島田が筏を渚まで運んでくれた。「班長殿、頼みますばい」と部下はいつた。「鱗に食はれんごとせえや。鱗は赤いもんが好かんちゅうけん、日の丸の旗を見せてやりや逃げよう」島田がさういふので、「鱗の方が腹下しするばい」と伸太郎も柄にない冗談をいつて笑つた。時川部隊長も礼三も、小隊長も水に靴のひたるところまで来て送つた。

錦戸少尉が伸太郎の肩に手をおいて、「お前は小さいときから水泳が上手だつたさうだが、博多の海を泳ぐやうなわけにはいくまい。気をつけてゆけ。泳いでると、疲れて来て、もうこれ以上

は泳げないといふときがきつと来る。そのときに、もうひと頑ばりしてゆけよ」といった。

万一を慮つて、書類は身につけて、必要なことはことごとく頭のなかに入れた。「それでは」と、ただ一人、心をのこして岬をあとにした。

黒い海の水は生ぬるかつた。両手を筏にかけ、足で水を蹴りながら沖の方へ出た。何度もふりかへつてみた。いくらも行かぬのに、もう陸地はただ黒一色に塗りつぶされてしまつて、誰の姿も見わけがつかなかつた。伸太郎は唇を噛んで、にはかに速力を増した。一刻も早くモロンへ着かなくてはならぬと心をさだめたのである。頭の上は満天の星である。南十字星もオリオンも北斗七星もあかるくきらめき、白煙のやうに天の川がながれてゐる。陸上で鉄砲声がきこえる。ふりかへると、とき折り闇黒のなかに火花の散るのが望まれた。頭上をうなりを生じて砲弾が飛ぶこともあり、近くに落ちてしまふことをあつた。ふと身体の周囲にぼうと青い光のただよつてゐるのに気づくと夜光虫であつた。しだいにうねりが高くなり、波の丘や谷にあげ下ろしされる。何時間か泳いだ。そのうちに、伸太郎は首をひねりはじめた。もうだいぶん進んでゐなくてはならないと思ふのに、たまに見えるマリベレス山の峰の形がいつまでも変らない。遠いのでさう急に変化するわけもなく、そのうへ星空なのではつきりとは認めがたいけれども、なにか後さがりをしてゐるやうな気がして仕方がないのである。どうもをかしい。モロンへは一路北上すればよいわけだが、方向だけそつちに向いてゐて、実際は逆行してゐるやうな気がする。伸太郎は耳をすました。どこか遠くの底の方で海鳴りがしてゐるやうである。潮流に気づいた。上陸する際にも潮流のために南へ流された。発動機でもながされたのだから人間の泳ぐ力の及ぶところではない。さう気づくと、これまでにはなるたけ沖へ出てゐたのだが、急に方針を变へて、海岸の方へ近づいた。バタアン半島は岬が多いので、それらの岬で潮流が遮られてゐるにちがひない。敵に近づくわけで危険はあるが、夜であるから注意してゆけば発見されることもあるまい。さうきめて、海岸の方へ寄つた。

山の形に注意しながら、進路をさだめた。そのときに伸太郎の頭のなかに、現役時代の内務班長であつた金子軍曹の顔と声とが頭にうかんでゐた。ちよつと見るといかにもいかつい鬼瓦に似た風貌をしてゐたが、細かい心づかひの人であつた。上海戦で戦死をしたが、いつも口癖のやうに、「兵隊といふもんな、どこでどんな戦死をせにやならんかも知れんから、なんにでも頭のはたらく練習をしとかにやいかん、どんなものにでも、ほほ精確な見当をつけることができるやうにならんと役に立たん」といひひひしてゐた。兵隊たちはさういふ訓練をいつか重ねて來た。伸太郎もいま困難な海上の進路に出て、さういふ古い言葉が新鮮なひびきをもつてよみがへつて來ることに微笑を禁じ得ないのである。逆行する感じはなくなり、やがてしだいに鉄砲撃も彼方になるやうである。

ときどき、陸地に敵の気配を感じた。深いと思つてみると岩礁にぶつつかつたり、足がとどいたりした。珊瑚礁があるらしい。敵船らしいものの影におどろいて、岩かけに潜んだり、やむなく沖へ出たりした。鱗を警戒していつでも短剣の抜けるやうにした。咽喉が乾くと水筒や瓢箪の水をのんだ。敵が谷川に毒を投じたので、葛からしほるわづかな水しかなかつた。軍靴をはいたままなので、まづ、足が疲れて來た。腰がいたくなつて來た。足を休めて筏を横だきにし、手で水をかいだ。手も疲れて來た。手でかくと夜光虫が青くだけた。時間などはまつたくわからない。ただ残して來た部隊の安否が気づかはれて、一刻も早くモロンへ着きたい一心である。手も足もしびれる思ひで、しばらくじつとしたまま波に浮いたりした。岩礁にあがつてすこし休んで行かうと思つてから、はつと出發のときの小隊長の言葉を思ひだした。勇気をふるひおこしてまた泳いだ。疲れて來ると放心したやうになつて、たつた一人で海上を漂つてゐることが不思議な夢のなかの出来事のやうに思はれて來ることがある。さまざまのことが幻影となつて脳裡を去來する。水のなかなので熱のあることをしばらく忘れてゐるが、頭がぼうとなつて來てあわてて岩にはひあがつてから、身体中が体熱で灼けてゐることを覺ることがあつた。任務を果すまでは絶対に倒れてはならぬと、渾

身の力をふるひおこした。

東の方が白んで来るのを見て、岩礁を探して、その蔭にかくれた。昼間は発見されるおそれがあるので行くことができない。濡れてぐじやぐじやになつた鹽からい乾麵麴をかじつた。さうして日暮れを待つた。長い日中である。銃砲声を聞き、飛行機の飛ぶのを仰いだ。濡れた写真をポケットから出して見たりした。疲れのため、腰から下は海につけて、岩のうへで眠つた。まつ青な空から強烈な太陽が照りつけて来て、上衣はたちまち乾き、まつ白な鹽を吹いた。何度か眼をさましたが、なかなか日が暮れなかつた。はるかの水平線に黒煙を見たが、敵か味方かわからなかつた。日没とともに、また海に入った。変らぬものは星である。また、一晩中泳いだ。十個ほどの乾麵麴は僕約をしてゐたところが、残しておいたのがみんな溶けてなくなつてしまつた。岩などにこびりついてゐる海草を噛んでみた。苦いのや甘いのや臭いのがあつた。貝殻をはがして食べてみた。魚の死骸が浮いてゐた。砲弾や爆弾を海へ落されるので眼をまはしたのかも知れない。熱氣ですぐに腐るが、新しさうなのはかじつてみた。疲労と空腹と熱とで、自分の身体が自分のものでなく、何度か臚々と消え入りさうになることがあつた。心を吐りつけ、身体を抓つたり叩いたりして、意識をふるひたたせた。夜間、舟艇隊の発動機の音を遠くで何度も聞いたやうに思つたが、もとより敵か味方かもわからず、状況は一切知られなかつた。

かういふ難行が三日つづいて、遂に人事不省に陥つた伸太郎は波とともに海岸へ打ちあげられたのである。そこが敵なのか味方なのか、そんなことはまつたくわからなかつた。渾身の勇気を振ひおこしながらやつては来たが、もはやそのやうな努力の可能に肉体が堪へることができなくなつてゐた。伸太郎の手は筏から離れ、身体は流木のごとく渚へ寄せられ、水打際近くの岩礁の間に沈んでゐた。夜明け近くであつた。しかし、伸太郎の努力は無駄ではなかつた。「新博多町」の最前線の歩哨が、岩礁のなかを波とともに漂つてゐる瓢箪を発見した。すぐに二人の兵隊が来て、伸太郎を海底から引きあげた。伸太郎の腰につけられた紐のさきにあつた瓢箪のみが水面に浮んでゐたのである。伸太郎はただちに応急手当をほどこされて、数十分の後、呼吸を吹きかへした。しかし意識はまつたくなく、奇妙な囁言を口走るに過ぎなかつた。モロンの野戦繩帯所の一室に寝かされた。軍医は数回の注射を打ちながら、「かういふ状態でゐながら、生きてゐたのが不思議だ」といつた。二日間は昏々と眠るばかりであつた伸太郎は、やうやく意識を回復〔すると、あたへられた〕し、任務を果した。〔それから〕伸太郎は必死になつて〔、〕ふたたびマササ岬へ〔かへ〕帰して貰ふことを願つた〔が、〕。許されなかつた。〔そのときには、〕四十度〔以上の〕から熱〔を發してゐて〕がどうしても下らず、四十二度になると、また囁言を〔口走ることもあつた〕といった。

②0 「陸軍（266）南十字星（二）」（1944.4.16）／658頁

また、五月五日には、敵最後の拠点であるコレヒドール要塞へ、壮烈な敵前上陸が決行され、わづか一日の戦闘をもつて敵を屈服せしめた。病院にはラジオも新聞もあつて、それらの戦況は洩れなくもたらされた。（4面）

②1 「陸軍（267）南十字星（三）」（1944.4.18）／663頁

ずゐぶん〔、〕困難な作戦であつたが、将兵諸君は、實に〔、〕よく戦つた。いまさらのことではないが、皇軍の強さには〔、〕いふべき言葉がない。

②2 「陸軍（267）南十字星（三）」（1944.4.18）／663～664頁

伸太郎は〔、〕だまつてうなづくばかりで、なにもいへなかつた。〔伸太郎君、君のまだ知らないことがある。多分、君が連絡の命令を受けて、マササ岬を出た翌々日のことにならう。朝くらいう

ちに、はじめて無電の連絡があつたんだ。それまで故障してゐた無電機がなほつたらしかつた。無電といふやうなものにも、いつか妙な性格ができると見えるね。戦闘司令所で受信してゐた兵隊が、思はず、まだ佐藤奴生きてゐやがつたと叫んだといふんだ。無電が来ないので、てつきりもうやられたと思つてゐたんだね。無電を打つにても、日本人の癖がでるとみてその佐藤といふのはいつもツツーを長く打つ癖があつたさうだ、それですぐ戦友であることがわかつたんだな。ところで、その電報は、『神崎部隊トノ連絡ツカズ、我が部隊ハコノ地点ニ於テ玉碎セントス』といふ悲壮な文面だつた。それから、戦況がいくらか打電されて來たんだが、向ふから来る暗号電文が綿密で一字一句の間違ひがないといふんだ。基地から連絡事項を打電したところが、こつちの兵隊はマササ岬の戦況が気になつてゐるんで、すこし興奮して暗号をまちがへた。すると、先方から、電文不明、もうすこし落ちついて打つてくれといふんだ。玉碎を決心した部隊の方が沈着であつて、基地の兵隊をたしなめてゐるんだね、あべこべぢやと、いひながら、おこられた兵隊はうれしさうに泣いてゐたさうだよ。それから、なにか大きな音がして、また無電が切れた。それきりまた通じなくなつた。そこですぐ舟艇隊を編成して、マササ岬に迎へに行つた。残念ながら、兵力の配置が手いつぱいで、救援にやる兵力がなかつたんだ。ところが、時川部隊長以下、たれ一人帰らうといふものがない。激戦をして損害を出してゐるんだが、まだ戦力がある、敵を撃滅する自信があるといつて下らうとしない。また隊長は多くの部下を殺しておいて、自分たちだけ帰るやうなことはできないともいふんだ。すでにマササ岬を死地と定めているんだね。止むなく空舟で引つかへして來たんだが、それでもいけないので、翌日、夜になつてまた行つた。今度も帰らうとはいはない。たうとう、四晩もつづけて迎へに行つたのに、一人も帰る者がなかつた』

友枝は眼鏡をはづして、指で瞼のうへをなでた。それから、微笑をうかべて、「伸太郎君、たしかに、時川部隊は玉碎した。〔略〕」

## ㉓「陸軍（269）御遺族様（一）」（1944. 4. 21）／671頁

これまで〔は、〕にまつたく未知の間柄であつたのに、共通する境遇と感情とで、すぐに〔、〕うちとけた話ができた。笑ひ声も〔、〕諸所でおこつた。

これで二度目といふ者もあつて、はじめての人たちに東京についてからことを話して聞かせる。高張提燈をつけた人々によつて東京駅頭に出迎へられて宿についてから靖国神社での諸行事、境内の大パノラマ、大祭が終つて手に持ちきれぬほどの土産物を貰つて帰国するまでの至れり尽せりの持てなし振りを細々と話すのである。かうまでされるのをかへつて恐縮してしまうさうである。「併め仕様〔も〕ない奴でしたのに、兵隊に行つて〔、〕はじめて、御奉公がでけましたわい。あんな奴は〔、〕死なんにや、なんのお役にも立つ奴ぢやありません」

このように、「南十字星」では伸太郎の決死の「使務」を軸として、大幅な加筆が施されている。伸太郎が一時的に離脱した時川部隊は、その間に玉碎を果たすが、その重みとバランスをとるような加筆である。ここでも、生／死に関わる“兵隊の精神”を強調していく加筆修正が行われていた。

以上、3-1～3-4の検証を通じて、特定の場面に大幅加筆があつたほかは、内容の変更などはみられなかった。表現上の修正のほかには、兵隊の言動を通じて、その思想がよりよく表現されるように改められたといえる。

なお、単行本では、装幀・カットを中川一政が担当した（初出時の挿絵、タイトルカットは用いられない）。同書には、部立ての扉ごとに5枚のカット、各章の扉ごとに29枚のカットが添えられた（初出時の挿絵、タイトルカットは使用されていない）。

## 4. 「陸軍」の同時代受容／展望

本稿の最後に、新聞連載時の「陸軍」が、当時どのように読まれていたのか、限られた資料からではあるが、その同時代受容を検証しておきたい。

連載から半年ほどが経った1943年の年次総括「一、本年度の新人について／二、従軍記・報道文について／三、本年度最も感銘を受けた文学作品 葉書回答」（『文芸』1943.12）に、「陸軍」への論及が散見された<sup>(26)</sup>。上田廣は「三」として、「『陸軍』がよいものになるのではないかと思つてゐます」（58頁）と回答している。また、中村武羅夫は、（明示はしていないが回答全体の3つめのパラグラフとして）火野葦平の「陸軍」石川達三の「日常の戦ひ」も愛読してゐます（64頁）と回答している。「陸軍」に最も長いコメントを寄せたのは、『徐州戦』（河出書房、1941）の著者・里村欣三だった。

三、丹羽氏の作品にも感心しましたが、火野氏の「陸軍」を愛読し、スケールも大きいが、軍隊生活の日常を取扱つてゐる点など、今までの戦争文学に大きな暗示を与へるものだと思ひます。あくまであのテンポで「陸軍」を書きつゝけて貰ひたいと思ひます。（62頁）

この総括記事の質問（の構成）自体が、戦争をモチーフとしたルポルタージュや文学作品を前提としているが、そうした枠組みのなかで、「陸軍」も一定の注目を集めていたことがうかがえる。

こうした「陸軍」受容の延長線上にあるのが、伊藤整「新聞と小説」（『改造』1944.5）である。「私はこの頃二つの新聞小説を楽しく読んで来た」という伊藤は、「一つは朝日新聞の火野葦平氏の「陸軍」であり、一つは東京新聞の高見順氏の「東橋新誌」である」と、「陸軍」に論及する。さらに、「支那事変が年を経て大東亜戦争へと推移するあひだに、新聞そのものの質が変つて來た」という伊藤は、その内実について次のように述べていく。

まことに、この頃の新聞記事の内容は、ただに倫理的になつたとか清潔になつたといふだけの変化なのではない。その一日分の報道は、以前の数ヶ月か数年分の報道の質量を持つてをり、あらゆる行文に祖国の運命の重さをたたえてゐるのだ。新聞を読ませなければ、今日の教育は出来ないのである。（26～27頁）

その上で、「記事の質量の重さに、あまりみじめに小説が負けないことをのみ私は念じてゐる」、「それを支へねばならぬといふ気魄が作家の筆に籠つてゐるだけでも、私は作者たちに感謝し、かつ声援を送りたい」という伊藤は、関連する小説とあわせて「陸軍」を次のように論じていく。

高見、火野二氏の作品に近時喜びを感じたといふのも、その辺の意味であり、また少し前の石川達三氏の「日常の戦ひ」、現在濱本浩氏の「船員」等に多少の注文と愛情とを抱いたことも、それに近い意味である。新聞小説は今の国民生活の「現在」から出発してゐるといふことで、最も難しいが、しかし全力で生きかつ書いてゐる作家にとつてはやり甲斐のある仕事といふ風に變つて來てゐると思はれる。（27頁）

国民生活との結びつき、という観点からの「陸軍」評価としては、石川悌二「小説の本願」（『日本文學者』1944.6）もある。石川は「陸軍」について、「中堅作家の思索として確かに注意をひく作品」、「力作」であり、「郷土や家族制度の日常をふりかへりながら、私小説的な筆を延してゆき、時相を一篇

の中に抱へこまうとした作者の野心は逞ましかつた」と評価した上で、次のように論及をつづける。

郷土、家、の環境や伝統の省察を私小説精神のまつとうさにおいて把握しようと試みた作者の意図は筋の進行に従つて漸時に、私の限界性を乗り越えて客観的な幅に到達しようとしてゐるのが認められた。全体に見渡せば、作者の大きな構想にも拘らず平板な感じがつきまとつて、殊に戦場の描写は現実的な強みを有つてゐながら昂揚が足りない。戦場に狎れた人間が驚きの心を失つてしまふていの主観的な不燃焼を思はせる。「陸軍」は恐らく文学者の間には相当価値高く買はれるであらうが、新聞小説としての面白さとか、大衆性の点では成功作ではないと思ふ。先に岩田豊雄氏が連載した「海軍」の好評を比較して思へば、「陸軍」の作者の泥くささ、身構への重たさが新聞小説としてマイナスになつてゐる点を指摘することが出来る。それはともあれ、「陸軍」は「海軍」に較べて文学の純粹さで一步上にある。(16~17 頁)

引用部後半では、「陸軍」に先だつ新聞連載小説である岩田豊雄「海軍」(『朝日新聞』1942. 7. 1~12. 24)<sup>(27)</sup>と対比しながら、大衆性／文学性という観点から両者を対照的な作品として位置づけている。

こうした、おおむね肯定的な評価の一方で、青木三六は「文学者の道」(『日本文学者』1944. 10)において、一般読者の噂話を紹介しながら「時局小説」ゆえのつまらなさを次のように評している。

ある駅で乗り込んだ若い二人の勤め人がわたしの隣の席を占めるとさつそく新聞を開いたが、一人が云つた。「陸軍読んでるかい」「読むもんか、糞面白くないものを誰が、——陸軍がなげいてゐるだらうよ」陸軍とは火野葦平さんの朝日新聞の連載小説のことである。

わたしも通読しなかつた読者の一人であるので、この勤め人の評語が正しいか正しくないか論ずる資格がないし、小説はただの面白さで読むべきものではないのだが、現在なんと面白くない小説の横行してゐることか。新潮文庫だとか日本文学全集だとか、古く出版された小説本に読みふける若い人達が電車なぞでめつきり眼につくやうになつたのも、新刊書の入手難もあらうが、この面白くない文学、千篇一律の時局小説の横行によるものではないか。(14~15 頁)

こうした指摘を、石川の指摘に重ねてみれば、「陸軍」はよくも悪くも戦時下に多く書かれた「時局小説」の枠組みのなかで捉えられ、大衆性は低くも見積もられつつも、文学性には一定の評価が示されていたといえる。換言すれば、文学的な魅力とは別のところで、その意義が重んじられていたのが、同時代における「陸軍」評価だといえそうである。

ちなみに、木下恵介監督による映画『陸軍』(松竹、1944)の公開に際して、火野葦平は「陸軍精神について」(『新映画』1944.12)を書き、「軍人勅諭がただに軍人に賜はりたるのみでなく、国民全体の仰ぎ奉るべき大精神である」とした上で、次のような執筆「意図」を表明している。

燐然たる日本の歴史、伝統、家、さういふものが、すでに生れ落ちたときから、日本人の肉体と精神のなかに、秘められた宝石のごとく浸みついてゐる。その美しい謙虚な伝承が兵営の淘冶に遇つて、さらに輝きを増す。かくて日本陸軍の強さといふものはひとへに国民そのものの立派さに根ざしてゐるのである。(15 頁)

さらに、「[1945 年] 二月七日」執筆とされる「後記」(『陸軍』朝日新聞社、1945)において火野は、『陸軍』を「いろいろな意味で、私にとつては記念の作品」だとして、次のように振り返っている。

私はこれまで兵隊や戦場に関する文章を若干書いて来た。たまたま私が歩兵下士官であつたために、多くは陸軍のことを主題とするやうになつたが、私が書きたかつたことはもとより陸軍海軍の区別ではなく、両者を含めた皇軍の立派さであつた。然し、私は常に一兵士の経験の上に立つて、切実さと謙虚さとを失ふまいと努めたので、作戦の全貌とか、戦争の本質といふやうな膨大な主題からは遠ざかつてゐた。(681~682頁)

ならば、火野の企図はどこにあったのかといえば、「陸軍そのものを書くよりも、その中に顕現された精神のありどころを確かめることに、眼と心とを集中した」と書かれたように、陸軍の「精神」である。しかも、火野によれば、それは陸軍に限ったものではない。

世界に冠絶せる日本陸軍の立派さは、さういふ特種の國際個有の性格に依るものでなく、ひとへに日本国民自身の立派さに外ならぬといふ私の考へは昔も今も変らない。それはまた、日本が受けついで來た精神、祖先の継承が一筋の美しい河のごとく今日まで流れて来て、また悠久の時間へ続いてゆくものを確信することによつて、神州を不滅とする頑固一徹な国民の信仰につながつてゐる。家と国との美しき結合と、これを支へる庶民の熱情のなかに、日本は永遠の栄光を放つものとして、静かに、しかし厳のごとく立つてゐる。この謙虚にして清浄な志が凝るときに、防人の悲壯さとなり、また、日本の兵隊の強さとなつた。(682~683頁)

ここで火野が主題として掲げているのは陸軍の「立派さ」だが、それは「日本国民」＝「庶民」のそれとも等しく、伝統によって支えられてきたものであるという。ここにみられる、厳密には異なる2つの要素を、等式によって結びつけていく修辞は、『陸軍』の特徴でもある。つまり、『陸軍』とは、「陸軍」に関わる“兵隊の精神”を、日本近代の「国民」の物語として書いた物語だといえる。

本稿では、ここまで「陸軍」-『陸軍』に関する書誌情報の整理を進め、いずれも戦時下に書かれた初出と単行本の本文異同を検証し、同時代受容の調査までを行つた。これらの研究基盤を前提としつつ、火野が太平洋戦争末期から戦後にかけて書いた兵隊を主題とした小説／エッセイを参照した上で、『陸軍』に書かれた“兵隊の精神”とも称すべき主題を考察することが、次の課題となる<sup>(28)</sup>。

#### 注

- (1) 拙論「“戦場にいる文学者”からのメッセージ——火野葦平「麦と兵隊」(『昭和一〇年代の文学場を考える 新人・太宰治・戦争文学』立教大学出版会, 2015), 「火野葦平「土と兵隊」の同時代的意義——文学(者)の位置」(『日中戦争開戦後の文学場 報告／芸術／戦場』神奈川大学出版会, 2018), 「戦場における“人間性”——火野葦平「花と兵隊」序論」(『日中戦争開戦後の文学場』前掲), 「新聞連載小説としての「花と兵隊」——火野葦平の小説／中村研一の挿絵」(『神奈川大学アジア・レビュー』2023.3) 参照。
- (2) この際の従軍体験／従軍記に関して、拙論「バターン半島総攻撃における文化工作——火野葦平「兵隊の地図」を中心に——」(『泉州英計編『近代国家と植民地性——アジア太平洋地域の歴史的展開』御茶の水書房, 2022), 「バターン半島総攻撃における文化工作II——上田廣「地熱」・柴田賢次郎「樹海」を中心に」(『神奈川大学アジア・レビュー』2022.3) 参照。
- (3) 本稿では、初出は「陸軍」、単行本は『陸軍』と表記し、一般的用法としては『陸軍』を用いる。
- (4) 澤村修治『ベストセラー全史【近代篇】』(筑摩書房, 2019), 358頁。
- (5) 坂口博「私は兵隊が好きである——火野葦平「陸軍」序説」(『敍説』1996.8), 73頁。
- (6) 村上兵衛「解説」(火野葦平『小説陸軍(下)』中央公論新社, 2000), 372頁。
- (7) 子安宣邦「反哲学的読書論1 黙って兵隊であるものの文学火野葦平『小説陸軍』」(『環』2004.10), 262頁。
- (8) 神子島健「補論 兵営を描く」(『戦場へ征く、戦場から還る 火野葦平、石川達三、榎山潤の描いた兵士たち』新曜社, 2012), 250頁。

- (9) 火野葦平「年譜」(『火野葦平選集 第八卷』東京創元社, 1959), 543~544 頁。
- (10) 坂口博は「『陸軍』と『魯迅』——八・一五を跨いだ本」(『敍説』1995. 1)において、「一九四五年八月一五日を跨いだ本」(55 頁)として火野葦平『陸軍』をとりあげ、「現存する本は殆どすべて（少なくとも私の確認した限りでは）小口・天・地（装丁用語で言う、本の背を除いた三方のこと）が未断裁となっている」(56 頁)と指摘している。
- (11) 『朝日新聞出版局五十年史』(朝日新聞社出版局, 1989), 150 頁。
- (12) 火野葦平「解説」(『火野葦平選集第七卷』創元社, 1958), 452 頁。
- (13) 注 6 に同じ, 376 頁。
- (14) 池田浩士『火野葦平論 [海外進出文学] 論・第 1 部』(インパクト出版会, 2000), 562 頁。
- (15) 鶴島正男「新編=火野葦平年譜」(『敍説』1996. 8)には、「二七四回連載」とあるが、正しくは 272 回である。
- (16) 玉井政雄『兄・火野葦平 私記』(島津書房, 1981), 169 頁。
- (17) 吉田裕『日本軍兵士——アジア・太平洋戦争の現実』(中央公論新社, 2017), 14~19 頁。
- (18) 真鍋元之「解説」(『火野葦平兵隊小説文庫 6』光人社, 1979), 372 頁。
- (19) 注 18 に同じ, 373 頁。
- (20) 注 18 に同じ, 373 頁。
- (21) 注 6 に同じ, 369~370 頁。
- (22) 安田武「戦争文学の周辺（一）——火野葦平論——」(『定本 戦争文学論』第三文明社, 1977), 168 頁。  
なお、西垣勤「火野葦平『陸軍』覚書」(『昭和文学研究』1992. 9)における次の二節は、安田論を参照したものだろう——「この作品は、一九四三年五月一日から『朝日新聞』に連載され、途中火野のインパール戦従軍で中断、帰国後再開、一九四四年四月完結。その後、火野は多くの筆を加え、単行本として朝日新聞社から市販されようとする時、戦争が終わる」(114 頁)。
- (23) 注 6 に同じ, 369~370 頁。
- (24) 注 7 に同じ, 263 頁。
- (25) 注 9 に同じ, 543 頁。
- (26) ほかに、火野葦平（他作品）については、丹羽文雄、橋本英吉、伊藤整、佐々木基一が言及している。
- (27) 拙論「太平洋戦争開戦を振り返る新聞小説——岩田豊雄『海軍』」(『文学と戦争 言説分析から考える昭和一〇年代の文学場』ひつじ書房, 2021) 参照。
- (28) 拙論「火野葦平『陸軍』にみる“兵隊の精神”——等式の修辞学」(松本編『錦箋』パブリックプレイン, 2025 予) 参照。

# Fundamental Study of Ashihei Hino's *Rikugun*

MATSUMOTO, Katsuya

## Abstract

This paper focuses on Ashihei Hino's *Rikugun* (『陸軍』, "Imperial Japanese Army"), a newspaper novel serialized in the Asahi Shimbun at the end of the Pacific War (1943–44). Previous studies of *Rikugun* have mainly focused on the fact that the book was published on August 15, 1945—the day the Pacific War ended—and have treated the work as a summary or portrayal of Japan's modern and military history from the perspective of the Takagi family. In addition, even the bibliographic information on *Rikugun* is riddled with errors, raising doubts as to whether researchers have actually examined the text. However, since *Rikugun* was serialized in a major newspaper for nearly a year and reached a wide readership at a pivotal historical moment, it can be considered a culturally significant work.

Therefore, in this paper, in order to initiate research on *Rikugun*, we investigate and organize the details of its original newspaper serialization, identify its differences from the book version, and examine how it was received at the time, with the aim of establishing a foundation for further study.